

一人ひとりに合わせた 「最新のがん治療」 ～個別化医療とチーム医療～

K-style

医療図書館

Vol.84

2026 夏号

がん治療の進歩

がん治療は、がんができた臓器だけで決める時代から、がん細胞の性質と患者さんの体調・生活背景・価値観を合わせて考える時代へ進んでいます。がんは、細胞の設計図である遺伝子に変化が重なることで起こる病気です。同じ「肺がん」「大腸がん」でも、がん細胞に起きている遺伝子変化や増殖の仕組みは患者さんごとに異なります。その違いを調べ、手術、放射線治療、薬物療法を最もよい順番と組み合わせで行うことを「個別化医療」と呼びます。

薬物療法も大きく変わりました。従来から用いられてきた細胞障害性抗がん薬に加え、がんの増殖に関わる分子を狙う「分子標的薬」、免疫にかかっているブレーキを外してがんを攻撃しやすくする「免疫チェックポイント阻害薬」、抗体に抗がん薬を結合させてがん細胞へ届ける「抗体薬物複合体」など、治療選択肢は広がっています。ただし、どの薬もすべての患者さんに効くわけではなく、副作用の出方も異なります。



川崎医科大学附属病院 臨床腫瘍科 部長 永坂 岳司

日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医、日本外科学会外科専門医・指導医、日本大腸肛門病学会大腸肛門病専門医・指導医、日本内視鏡外科学会技術認定医

す。検査結果、これまでの治療歴、臓器機能、持病、日常生活で大切にしたいことを確認しながら、治療を選びます。

チームで支える がん治療と副作用マネジメント

当院の臨床腫瘍科では、外科、放射線科、病理診断科、薬剤師、看護師、管理栄養士、リハビリスタッフ、医療ソーシャルワーカーなどと連携し、治療方針を検討しています。標準治療を基本としながら、条件が合う場合には臨床試験も含めて選択肢を検討します。大学病院として、複数の専門職が集まるカンファレンスを通じて、患者さんにとって安全で納得いただけるような治療を目指しています。

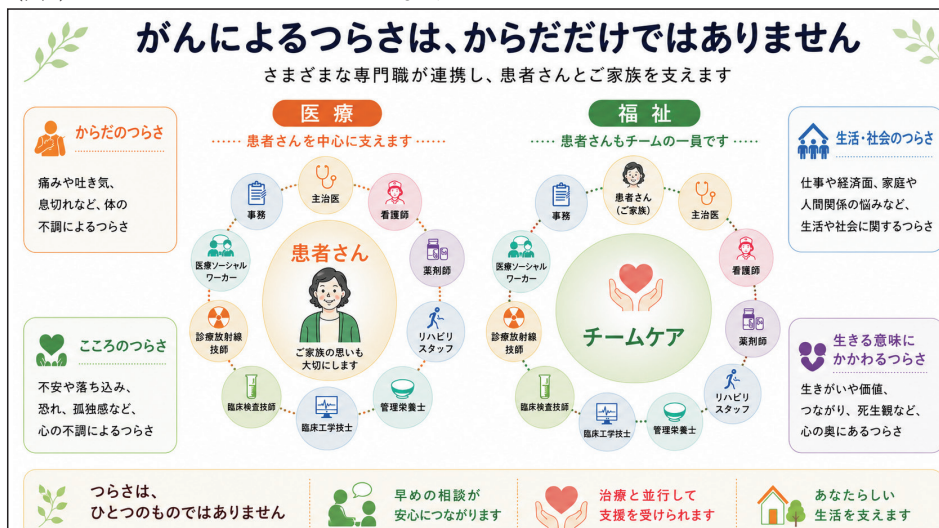
治療中は、効果だけでなく副作用の予防と早期対応も重要です。発熱、下痢、皮疹、しびれ、倦怠感、食欲低下などは、薬の種類により対処法が異なります。自己判断で休薬や市販薬を使用する前に、医療スタッフへ相談いただくことで、重症化を防ぎ、治療を安全に続けられる可能性が高まります。

もう一つ大切なのが「緩和ケア」です。緩和ケアは終末期だけの医療ではありません。診断された早い時期から、痛み、息苦しさ、吐き気、だるさ、食欲低下、不眠、不安、治療に伴う副作用などを和らげ、患者さんとご家族が治療と生活を続けやすくするための医療です。つらさを我慢してから相談するのではなく、治療と並行して症状や不安を早めにスタッフへ共有することが大切です。

生活の質を支える治療の選択

治療を選ぶ場面では、「がんをできるだけ小さくしたい」「仕事や家庭生活を続けたい」「通院回数を減らしたい」など、患者さんの希望も大切な情報です。医学的に勧められる治療と、患者さんが大切にしたい生活の両方を確認しながら、納得して治療に進めるよう支援します。

(図1) がんによるつらさとチームケアの考え方



がん治療の目標は、病気を完全に治すことだけではなくありません。生活の質を保ち、その人らしい時間を支えることも重要です（図1参照）。ご不安や疑問がある場合は、一人で抱え込まず、主治医や臨床腫瘍科にご相談ください。

がんによるつらさは、からだ・こころ・生活や社会・生きる意味にかかわるつらさが重なって生じます。左の「医療」は、患者さんを中心に多職種が支える姿、右の「福祉」は、患者さんとご家族もチームの一員として専門職と一緒に治療と生活を支える姿を示しています。

がんの弱点を調べる最新医療

がんゲノム医療とリキッドバイオプシー

遺伝子情報に基づくがん治療

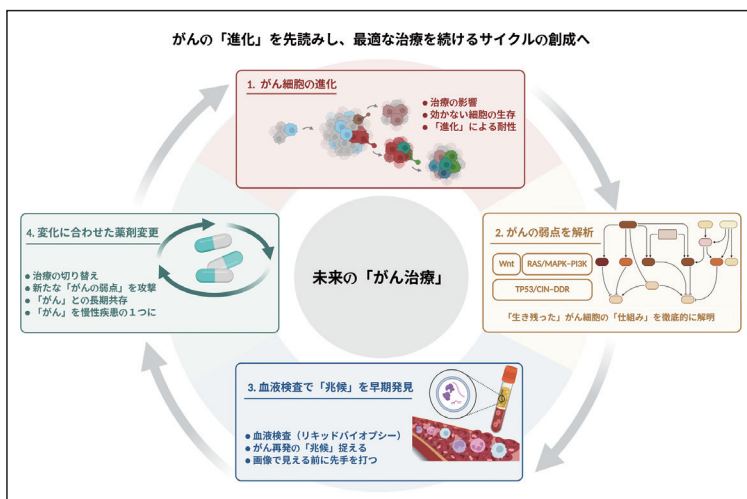
「がんゲノム医療」とは、がん細胞に起きている遺伝子の変化を調べ、治療に役立つ情報を得る医療です。従来は、がんが発生した臓器や病理診断をもとに治療を選ぶことが中心でした。現在はそれに加えて、がんの増殖を促している遺伝子変化、免疫療法が効きやすい可能性を示す指標、治療抵抗性に関わる変化などを確認し、より適した薬剤や臨床試験を検討できるようになってきました。

中心となる検査が「がん遺伝子パネル検査」です。手術や生検で採取したがん組織を用いて、数十から数百種類の遺伝子をまとめて調べます。現在、この検査は保険適用となる条件（標準治療が終了した、あるいは終了見込みの患者さん、または原発不明がんや希少がんの患者さんなど）が定められています。結果は、主治医だけでなく、臨床腫瘍医、病理医、遺伝医学の専門家、薬剤師、看護師などが参加する専門家会議で検討されます。遺伝子変化が見つかったも、必ず対応する薬があるとは限りません。一方で、標準治療に加えて分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬、治療・臨床試験などの候補が見つかることがあります。

血液で調べるがん検査

近年注目されているのが「リキッドバイオプシー」です。血液中にごく少量流れ出したがん由来DNAを調べる検査で、体への負担が少ないことが特徴です。血液を用いたパネル検査も保険適用で行えるようになっていますが、現状では医学的な理由でがん組織を採取しにくい場合などに限られています。利用

(図2) がんの変化を確認しながら治療を見直す



できる検査や保険適用のタイミングは、がんの種類や病状によって異なります。検査には準備が必要ですので、希望される場合は現在の主治医と情報共有しながら進めます。現在、日々の診療で保険適用として実施できる検査にはまだ制限がありますが、当院では大学病院として「がん治療の未来」を見据えた研

がん治療・ゲノム医療に関する相談の目安

チェック項目

- ☐ がんと診断され、薬物療法や副作用対策について詳しく知りたい
- ☐ 標準治療後の選択肢、臨床試験、セカンドオピニオンについて相談したい
- ☐ 主治医から「遺伝子パネル検査」や「がんゲノム医療」の説明を受けた
- ☐ 血液でがんの状態を調べる検査（リキッドバイオプシー）に関心がある
- ☐ 痛み、吐き気、息苦しさ、不安などのつらさを和らげながら治療を続けたい

当院の取り組みと治療への支援

当院では、がんゲノム医療連携病院として、患者さんに検査の目的、利点、そして現在の限界についても丁寧に説明し、検査結果を治療方針に結びつける支援を行っています。遺伝子検査の結果は、患者さんご本人だけでなくご家族に関わる情報を含む場合があります。必要に応じて遺伝カウンセラーにもつなげます。最新医療は「必ず効く特別な治療」ではありませんが、標準治療を大切にしながら、次の選択肢を探索するための重要な手がかりになります。

究にも鋭意取り組んでいます。例えば、血液検査を活用してがんの性質の変化（進化）をいち早く捉え、薬が効かなくなる兆候を予測して先手で治療を工夫するよう、より患者さん一人ひとりに最適化された治療の実現（図2参照）を目指しています。

